

『斜陽』論

—〈復員者〉—という視点でみる直治—

花岡 紗椰香

はじめに

太宰治の「斜陽」は一九四七（昭和二十二）年七月一日発行の『新潮』第四十四巻第七号から第四十四巻十号までの全四回にわたり「長期連載」として発表された。雑誌掲載時からその反響は大きかったようで、十月号の「編集後記」では「恐らく、この「斜陽」は、本年度日本文學における最高の收穫ではあるまいか。」と絶賛されている¹⁾。その後、同年十二月十五日に同じく新潮社から単行本が刊行され、雑誌掲載時からの人気を引き継ぎ、多くの読者を獲得した。十二月十五日付で刊行された「斜陽」は、初版で一万部、再版で五千部、三版で五千部、四版で一万部と版を重ね、翌年の一九四八（昭和二十三）年七月の新版と併せて一九四九（昭和二十四）年三月までに十二万部を超したようである。後期の人気には作者自身の自殺というセンセーショナルな事件の影響

も大きく関係してはいるが、「斜陽」が当時多くの人々に読まれていたということがわかる²⁾。

「斜陽」が当時の人々の心を揺さぶった理由とは、一体何だったのだろうか。この点に関して野平健一氏は、『斜陽』は、その素材だけで、時流に投じたと思われるフシがたくさんある」と述べており、こういった指摘からも発表当時の「斜陽」人気には、当時の時代背景が関わっていると言えるのではないだろうか。

これまでの「斜陽」研究では、太宰の当時の女性関係や生い立ち、アナキズム思想、作品に登場するキリスト教などの宗教観、着想のきっかけとなったアントン・チェーホフの『桜の園』、あるいは太田静子の日記などを手がかりに母やかず子、直治、上原といった各登場人物についての考察が多くなされてきたようである。そしてその中でも主人公かず子の弟である直治については、作者である太宰とイコールで結ぶ

捉え方が長年主流となってきたようだ。

直治の同時代評として、豊島与志雄は、直治は作者である太宰自身に「うんと引きつけた人物」であると座談会で述べ、また高見順も作中の「夕顔日誌」は「そっくり昔の太宰」であると指摘している。このように作中の登場人物である直治の姿と青春時代の太宰の姿を重ねる読み方は、発表当初から盛んに行われ、また現代にいたるまで引き継がれており、直治について考察する上で主流の考え方となっている。

確かに先行研究で指摘されているように、直治と太宰の青年期は重なる点が多い。具体的な年齢には誤差があるものの太宰も直治と同様に薬物中毒の経験があり、また自身の出身階級に対する苦悩を抱えていた。さらに、太宰の他作品においても直治と似た人物が登場している。例えば、太宰が薬物中毒で入院していた際のことを元に書いたと言われる「[IC] MAN LOST」(『新潮』一九三七年四月一日、新潮社)という作品には、散文的な文章の書き方で薬物や自分自身、身の回りに対する苦悩が書かれており、直治の「夕顔日誌」を想起させるものとなっている。また、饗庭氏が「直治に太宰の自伝的要素があるといってもよいくらいである」と指摘しているように、太宰自身も意識的に直治と自分の過去を重ねて描いたと推測できる。

以上のようなことから直治＝太宰という考え方ができることは確かである。直治と太宰は両者の最も印象に残る性質が

類似しているため、読み手側は両者がびったりと重なるかのよう錯覚してしまう。しかし、直治と太宰の間には完璧に重ならない部分も存在するのである。

中でも太宰と直治で大きく異なる点は、直治が〈復員者〉であるという点である。太平洋戦争では日本にいるほとんどの男性が戦争に参加した。直治もその中の一人であり、学生ではあったが徴集を受けている。一方太宰は、そのような時代の中で身体検査を受けるも「肺浸潤」の診断を受け、徴兵を免除されている。したがって、太宰は「分身」とされる直治とは異なり、戦場に行った経験がないのである。もちろん〈復員者〉でもない。これまでのように直治を太宰の青春期という型に嵌め込んで読んでしまうと、両者の間に生じるこの差異を無視してしまうことになるのだ。

「斜陽」が発表された一九四七年は太平洋戦争が終了してから二年が経過しており、〈復員者〉と呼ばれる戦場から帰ってきた兵士たちが大勢存在した。そして、繰り返し言うのだが「斜陽」の直治も戦争が終わった翌年に南方から帰還した〈復員者〉である。片山晴夫氏は「斜陽」の魅力は直治にあるとし、直治の〈復員者〉としての一面を考察しながら、直治は「斜陽」の一篇の中でのみ留まるものではなく、昭和二十年代の文学の流れの中に位置づけることができる」と述べている。 「斜陽」が当時の人々に与えた「衝撃」の要因を考えると、片山氏の指摘のように直治の〈復員者〉という

設定は見過ごせないものと思われる。だが、直治の〈復員者〉という設定と当時の時代背景について詳しく言及した先行研究は少なく、ほとんどの論文では触れる程度に留まっている。そのため、今回は、大宰と直治の差異の中でもこの点に焦点を当て、当時の〈復員者〉が実社会の中でどのような存在であったのか、また「斜陽」以外の文学作品ではどのように描かれてきたのかということ整理し、「斜陽」と比較しながら直治が当時の社会でどのように受容されたのかということ時代背景と共に考察していく。

なお、本文の引用は『大宰治全集 第十巻』（一九九九年一月、筑摩書房）に拠る。

一、〈復員者〉の実態

直治は先にも述べた通り、一般的に〈復員者〉と呼ばれる存在である。そのためまずは〈復員者〉について時系列に沿って概観したい。

〈復員〉とは、「戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと。」⁹⁾を意味する言葉である。つまり、〈復員〉は戦争に行っていた兵士が一般社会に復帰することを指し、〈復員者〉は兵役を終え、一般社会に復帰した兵士のことを指す。また〈復員〉は、戦場へ送るために兵士を集める意で使われる〈動員〉の対義語として使用される。

一方、類似の言葉に〈引揚げ〉または〈引揚げ者〉という

語があるが、これは〈復員〉が兵士（将兵）が社会に復帰することを指すのに対し、満州等へ移住していた民間の邦人が日本に帰国することを意味する。本来〈復員〉と〈引揚げ〉はこのように区別されていたようであるが、時を経るにつれ復員業務、引揚げ業務ともにある程度落ち着いてくると、どちらも引揚げ業務と総称されるようになり、〈復員〉と〈引揚げ〉の区別は無くなっていったようである。¹⁰⁾

海外部隊の復員については、九月十日の「帝国陸軍（外地部隊）復員実施要領細目」（陸機密第五九〇八号）に従い準備が進められた。海外の各部隊は、終戦時戦闘を行っていた地域によって降伏すべき相手と各国軍の管理地域により降伏調印を行った。その後武装解除をし、連合軍が指定した各收容所で捕虜生活を送りながら〈復員船〉と呼ばれる迎えの船の到着まで待機が命じられた。また、收容所に集まるにしても必ず現地に指定された收容所があるとは限らず、広大な土地に散らばってしまった兵士を集めるには連合軍も非常に労力を要したようである。

收容所に收容された兵士たちは本来、国際法に基づき強制労働を強いられないことになっていた。そのため南方軍は日本軍を俘虜（P.O.W.）として強制労働に服させられることが無いように連合国に申し入れをしていたが、收容所によっては苛烈な強制労働を強いられた。特にビルマなどの島は悲惨なものであったと言われている。また、昭和二十年九月上

旬以降は各地で「作業隊」と呼ばれる労働従事者が生まれた。さらに、収容所によっては強制労働の他にも長時間労働、休憩時間・食事のカット、休日取り消し、嫌がらせ、体罰などもあったそうであり、中でも日本軍への怨恨が深かったと言われる英、仏、蘭、豪軍の施設ではこうしたことが多発したそうである。また、ソ連管理地域については武装解除した日本軍が「作業隊」として再編成され、シベリアに移送されてしまい、生活は過酷を極め復員開始を他の部隊よりも遅い昭和二十一年十二月以降まで待たねばならない事態が発生した。

「斜陽」の直治は、南方からの復員者という設定になっているが、南方軍は昭和二十年八月二十日の戦争停止にともない、地区ごとに連合軍との交渉を開始した。南方軍の降伏調印式は九月十二日であり、シンガポールで行われた。

海外から帰還した復員者および引揚げ者は、浦賀、

年月	帰還者数	年月	帰還者数	年月	帰還者数
20. 9	131,205	21. 4	516,500	21.11	72,062
20.10	245,103	21. 5	579,557	21.12	91,212
20.11	317,847	21. 6	625,482	22. 1	88,004
20.12	247,582	21. 7	374,383	22. 2	67,262
21. 1	221,714	21. 8	176,186	22. 3	100,737
21. 2	248,008	21. 9	209,385	22. 4	69,159
21. 3	568,826	21.10	335,188	22. 5	71,557

(『引揚援護の記録』) 所収「引揚者受入月別統計」)

昭和20年9月～昭和22年5月までの帰還者数の変遷⁽¹⁾

舞鶴、下関、博多、佐世保、鹿児島、函館、宇品、唐津、別府、名古屋などの港にそれぞれ運ばれた。これらの港の中で最も多くの帰還者があったのは博多であったようである。復員者の中には、飢餓状態や戦場での恐怖体験から戦争精神病を患っているものも少なくなかった。また、一部の船では積年の恨みから、上官に対するリンチが起こることもあったそうだ。

このような過酷な状況下で無事に各港に着くことができた船は、まず乗船者たちが疫病（コレラ、ペスト、チフス、黄熱病、痘瘡）に罹患していないか臨船検査を行い、検査した。ここで異常無しが確認されるとようやく上陸が許可され、入国・復員手続きの際に各人がそれぞれ「復員証明書」「引揚証明書」「給与通報」「罹患証明書」「日銀券（現金）」を受け取った。その後「即日帰郷」か「引揚擁護所」で数日過ごした後の帰郷かのどちらかを復員者本人が選べたようである。また、復員者は弁当や乾パンなどの食料の他、帰郷までの電車の切符なども受け取ることができた。

その後復員者たちは、実家の農業を手伝ったり、新たな職を見つけたりと、それぞれが戦後社会で新たな生活を始めた。終戦から四年経った昭和二十四年六月以降の復員者約四万七千人余りの就職状況調査によれば、家業に従事した者は、農業一万五九一八人、商工業三七七六人、その他事業一五〇一人、前職のサラリーマンや公務員に復職した者は原職復帰

が八三二六人、新規が四二一〇人であり、これ以外は求職中あるいは療養中となっている。なお、復員した者が教職に就くことは昭和二十年十一月一日の時点では、GHQの「軍国主義を払拭する」という意図の指令により禁止されていた。

また復員業務については、陸海軍省が二十年十一月三十日に廃止、第一復員省（元陸軍省）、第二復員省（元海軍省）へ改組され、それぞれがそれぞれの復員業務も請け負ったが、その後も何度も改称や統合、廃止を重ね、かつて復員業務を担当した部署は現在の厚生労働省社会・擁護局になっている。また、当初復員や引揚げ業務については日本政府や都道府県によって行われていたようであるが、このやり方に対しGHQ側が懸念を示し、GHQの参謀第三部引揚課を中心にして指導権の行使があったようである。

以上のように、複雑で煩雑な業務のもと戦後日本の一大事業である復員業務が行われ、多くの兵士たちが米軍に占領された日本へ〈復員者〉として帰還したのである。

それでは、このように様々な困難を乗り越え復員した者たちは戦後日本社会でどのように受け入れられたのであろうか。

二、戦後社会における復員者像

復員者については当時様々なメディアで取り上げられた。特に新聞では、復員が始まる日時や復員者の氏名、戦場で戦った兵士を温かく迎えることを呼びかける記事などが連日のよ

うに掲載されたが、終戦から数か月が経過すると、復員者に對して好意的ではない記事が散見されるようになる。

戦後、食糧難や物資不足から強盗や窃盗、殺人事件が戦中と比べ増加し、新聞でも毎日のようにこのような事件について報道された。一九四五年十二月二十二日の朝日新聞朝刊では「強盗全國に跳梁 警保局にきく対策」という見出しで、昨今強盗や傷害事件が全国的に増加していることが報じられている。〔東京朝日新聞朝刊〕一九四五年十二月二十二日）そして、これらの犯人として挙げられることが多かったのが「國民帽軍用被服」を着た復員者たちであった。先程と同日の新聞に掲載された「殺す素人集團（帝都の犯罪兇暴化）」〔東京朝日新聞朝刊〕一九四五年十二月二十二日）という記事には、

帝都の殺人事件数は本年度一月から終戦時までは九件だったが、終戦後約四ヶ月の間に二十三件にはね上った。強盗は先月が二十八件、今月は上旬だけで既に十六件におよんでゐる、再犯者の大部分は單獨で犯罪を行ふといはれるが、最近の事件は二人組、三人組が目立つ、追剥程度ですむものと想像される犯行の場合でも殺してしまつてゐるのが多いのをみても、犯人の多くが初犯者だと推定される（略）犯人は二十歳から二十五、六歳の青年で、國民帽軍用被服を着てゐるものが多いとされてゐる

とあり、戦後凶悪な殺人事件が激増しているということと共

にその犯人として挙げられることが多いのが「軍用被服」を着た二十代の若い青年たち、つまり復員者であると報じている。その後も類似の報道が数多く見受けられる。一九四五年十二月二十六日には「特攻隊員 辻強盗に轉落す 悪友に誘はれて(泣いて語る『罪の心境』)」(『東京朝日新聞朝刊』

一九四五年十二月二十六日)という記事が掲載され、クリスマスイブの日に浅草界限を荒らしていた不良少年の一味が警察に捕まった一件が伝えられている。この時捕まったのは十七歳と十九歳の少年二人で、うち一人は終戦当時、海軍の「水際特攻隊員」であったとされている。この記事では昨今復員者(元特攻隊員)による事件がなぜ多いのかということについても言及されており、犯人の復員少年にも「復員後眞面目に職につくつもりはなかったか」「復員當時に貰った金はどうしたか」などの質問をしている。その中でも記者の「嘗て特攻隊員として國民から尊敬されてゐた身が辻強盗をやった時の氣持ちは？」という質問に対し復員者の少年は、「厭だつた(泣く)、しかし復員當時は兵隊が負けたんだという風な態度で扱はれまた敗殘兵ともいはれた(激しく泣く)」と感情を露わにして答えており、戦中は「神風特攻隊」や英靈などと人々から神聖視され、もてはやされた復員者たちが戦後、本土に帰ってくると今度は手の平を返したように「敗

殘兵」などと罵られるようになっていたという当時の非情な社会背景がうかがえる。

また、復員者たちは「敗殘兵」という呼び名の他にも「特攻隊くづれ」と言われ、非難されることがあつたようである。一九四五年十二月二十七日には「素質低下も多い「特攻隊」に 第一復員省談」(『東京朝日新聞朝刊』一九四五年十二月二十七日)という記事には、「治安の亂れと共に復員軍人についてとかくの噂を生んでゐる、殊に「特攻隊くづれ」といふいまはしい言葉すら流行してゐる。」などがある。

さらに作家の志賀直哉は、一九四五年十二月十六日の朝日新聞の「聲」に「特攻隊再教育」(『東京朝日新聞朝刊』一九四五年十二月十六日)という投稿を寄せ「特攻隊として」「特殊な精神教育を受けて來た青年たちをそのまま復員してしまつた事は、政府として無責任極まる措置」であつたと政府を非難し、「特攻隊くづれ」と言われる青年たちに同情の意を示した上で、青年復員者たちの「再教育」の必要性を説いている。しかし、こうした復員者に寄り添う声がある一方で同じ紙面には「首魁は復員軍人強盜團の首謀三名逮捕」(『東京朝日新聞朝刊』一九四五年十二月二十七日)という記事が掲載されおり、一部同情の声はあつても、やはり復員軍人のモラルを疑う世間のイメージはなかなか払拭しにくい状況にあつたということがうかがえる。このような新聞記事から、復員者に対する世間の評価は決して好ましいものではな

く、むしろ戦後社会において復員者は「敗残兵」や「特攻隊くづれ」などと嫌厭される存在であったということが知れる。それでは、こういった社会状況に対し当事者である復員者たちはどのような感情を抱いていたのだろうか。

一九四五年に十九歳で地元静岡に復員した渡辺清氏（一九二五―一九八一）は、一九四一年の高等小学校卒業後に海軍を志願し、戦艦武蔵に乗船、マリアナ・レイテ沖海戦に参加していた。渡辺氏は復員後、精神的に落ち込こんでしまい、家に籠りがちになってしまっていたが、その際に日記をつけていた。そこには当時の復員者に関する記述が多く見受けられる。

例を挙げると、昭和二十年十一月二十六日の日記には「予科練あがりの特攻隊員」が起こした「覆面ピストル強盗」事件と復員者に対する世間の評判について記されており、新聞等で報道される復員者の評判があまり好ましくないことにも触れられている。さらに、渡辺氏が「村でも復員兵の評判はまことに芳しくない。」と語っていることなどから東京などの都心部に限らず地方の村に至っても復員者に対して「何をしてくるかかわからん」というイメージを抱いていたということも分かる。つまり、復員者に対する好ましくない印象は全国的なものだったのである。また、渡辺氏は罪を犯してしまった「復員兵の気持ちにはわかるような気がする」と語り、復員者の若者たちが戦後社会の中で「何もかも信じられ

なくなつて」といると指摘している。このことから、帰還した若者たちの多くが実際には犯罪を起こさないにしても戦後社会やそこに暮らす人々、そして自分自身に対する不信感を心の内に秘めていたということが推測できるのである。

また、翌年の昭和二十一年一月十六日の日記では、年を跨いでもなお発生する「復員強盗」に対して「本人に責任がある」としながらも「すべてを復員兵のせいにしてしまうのは片手落ち」であるとして、世間に非難される復員者を「御愛慮遊ばされる」天皇や社会にもその責任があると批判している。加えて渡辺氏は「須らく起つべし」の号令にこたえて、正直に起ちあがったおれたちは、逆に「悔いを万代に残」したのだ。」と戦後、復員者に対して非難の言葉や視線を浴びせる民間人への憤りを露わにしている。戦中、復員者たちは戦争に行くことが正義であり、誠であると教え込まれ、国やそこに住む人々のために命を懸けて戦ってきた。にも関わらず、命からがら帰ってくると今度は「敗残兵」などと罵られたのである。こうした現実には渡辺氏が言うように「すこしも「くづれ」ない」復員者はいなかったのではないだろうか。先にも述べたように、このように復員者の心の中には社会に対する不信感が少なからず生まれていたと考えられるのである。

しかし、このような思いを日記に記す渡辺氏も家に引きこもりがちではあったものの、実家の農作業の手伝いなどをし、

実際に罪を犯すことはなかった。当時の新聞等の報道には、復員者が起こした犯罪が多く取り沙汰されているのが目につくが、当然のことながら実際に強盗や殺人等の事件を起こした復員者は一部なのである。だが、実社会では、渡辺氏の記事からもうかがえるように世間では復員者は「おっかねえ」「何をしでかすかわからん」者という目で見られていた。戦場という別世界から帰ってきた復員者達は、戦後の社会を生きる人々にとっては、危険人物であり、ようやく訪れた平穏な日常を破壊するも人物であったのである。そして、このような復員者像が形作られた要因には前掲してきたような新聞等メディアの存在が推測される。

三、文学作品に描かれた復員者について

戦後、ほとんどのものが焼尽と化してしまい、多くの娯楽が失われた中、様々な文学雑誌が雨後の筍のように誕生する。一九四五年八月十五日以降『光』『新生活』『新生』『太平』などの雑誌が新しく創刊され、『文學』『文藝春秋』『新潮』『早稲田文学』などの雑誌も復刊した。一九四六年には、『近代文学』『世界』（創刊）、『中央公論』『改造』『三田文学』（復刊）など百種を超える雑誌が刊行され、続く一九四七年にも約六十種以上の雑誌が刊行したようである。雑誌刊行に欠かせない紙が不足し、なかなか満足に供給することができない状況であっても人々は娯楽を文学作品に求めたようであ

る。このような風潮から戦後社会に生活した人々にとって文学作品が及ぼす影響は現代よりもずっと大きかったと考えられる。では、文学作品に登場する復員者は一体どのような人物として描かれていたのだろうか。

終戦後の人々の生活から切っても離せないものであったこともあり、「斜陽」以外の作品でも作中に復員者が登場するものは数多い。その中でも今回は「斜陽」以前に発表された作品の中から、林芙美子「雨」（『新潮』、一九四六年二月）、井伏鱒二「橋本屋」（『世界』、一九四六年十一月）、田村泰次郎「肉体の門」（『群像』一九四七年三月）、を取り上げ、その中で描かれた復員者像について比較、考察していくことで、文学作品に描かれた復員者像を見ていきたい。

「雨」には、孝次朗という二十九歳の青年復員者が登場する。彼は終戦後の「一月×日朝」中国から佐世保へ帰還したが、故郷では「去年の春」、既に戦死したとされており、そのため出兵前に籍を入れた妻も弟の元へ嫁ぎ直してしまっていた。こうしたケースは文学作品だけではなく、当時の実社会でも頻繁に見られたようである。戦争当初日本では「戦場掃除及戦死者埋葬規則」が制定され戦地での遺体回収と送還の方法が確立されていた。しかし、敗戦色が濃くなった頃には遺族の元に届けられる遺骨箱の中身が必ずしも「実骨」ではなく、遺髪や遺爪、果ては戦地の石ころや砂、名前を書いた霊璽のみなどといった本人であるか否かの確認が困難な、

いわゆる「空の遺骨箱」が多くなつたようである。そのため、本人が所屬している部隊が玉砕や特攻をした際などは、実際には戦死していないにも関わらず戦死したと遺族に報告されてしまう事態が多発した。こうしただずさんな状況下で孝次朗もまた「空の遺骨箱」が家族の元へ届けられ、戦没者とされてしまったのだろう。こうして戦後社会に居場所がない復員者達は帰りたいと希求していた〈家〉に帰ることができず、やり切れない気持ちや絶望感を抱くことになつたのである。

「橋本屋」に登場する洋太郎という復員者もまた「四年と二箇月」ぶりに復員したにも関わらず、先述した孝次朗と同様に戦後社会において既に亡き者とされてきた者達の一人である。さらに洋太郎の妻は村の権力者に「籠絡」され、子自身籠り、家を出てしまつていた。そのため洋太郎は、復員後家に一度は戻るものの寝ていた子どもの頭を撫でるとそのまま村に戻ってくることはなかった。一人息子がこうした状況に陥ってしまったことに對し洋太郎の父は精神の安定を失い、「汽車の窓から桃を投げる奇病にとりつかれて」しまう。

「肉体の門」には伊吹新太郎という二十四、五歳の復員者の青年が登場する。彼は、先の二作品に登場する復員者達とは少々異なり、生命力に溢れた盛んな青年として描かれている。しかし、伊吹は戦争意識からなかなか抜け出すことができない。戦後の社会の中で「極めて自然」なこととして強盗や窃盗を行い、牛一頭を盗み出し返り血で体中が真っ赤にな

ることも厭わず、一人で牛を捌いて食べる。また、戦場に行った経験が無い者達と歩み寄ろうとはせず、「戦友」達を懐かしんでいる。このような行動をする一方で伊吹自身は自分を「特別な人間とは思つて」おらず、「世間の中へ溶け込んでいける」と信じている。しかし、実際には伊吹がそう簡単に世間に馴染めるとは考えにくい。復員者である伊吹は、戦後社会においてもなお、戦争意識から抜けきれないでいるのである。

ここまで、「雨」「橋本屋」「肉体の門」と「斜陽」の発表以前に発表された復員者に関わる文学作品を概観してきたが、登場する復員者たちにはいくつかの共通点があつた。

まず多くの場合復員者は、敗戦後の社会において〈取り残された者〉〈時代に追いつけない者〉であつた。「雨」の孝次朗も「橋本屋」の洋太郎も戦場からようやく実社会に帰還したにも関わらず、ずっと帰りたいと希求していた自分の居場所は既に他人の物となつており、自分無しでも大切な人々が普段通りの生活をしている状況に直面する。また、伊吹は戦後社会においてもなお戦場意識から脱することができず、戦争が終結した社会に馴染むことができない。これらの人々は新しい社会の輪から外され、前時代に取り残されてしまつているのである。

その他の共通点としては、〈語らない〉という点が挙げられる。一部の例外はあるものの、多くの場合復員してきた者

は自身の戦争体験を語ることに積極的ではない。このことは文学作品だけに限らず、実社会においても一般的に見られたことであつたようだ。戦場を経験した者たちとつて、戦場での出来事は思い出したくないことであり、もし口にしてしまえば思い出さざるを得ない。辛い思いをすればするほど、語ることを避けるようになるのである。

文学作品に描かれた復員者には、以上のようないくつかの共通点を見つけることができた。このような復員者像は当時の社会においてイメージされていた復員者像を反映して描かれたものと考えられる。したがって、こうした作品を読んだ当時の人々は作品に登場する復員者を一つの典型的な復員者の姿として受け取っていたということが推測できるのである。

また、作品の中で描かれた復員者像の特徴として〈時代に取り残された存在〉であるという点が挙げられると先述した。しかし、敗戦後の社会においては復員者以外の人々の心中にも、実際には復員者たちのように時代のスピードについていけない部分が少ないからずあつたのではないだろうか。一九四五年八月十五日正午のラジオ放送で戦争の終結が告げられたが、それまで何年間も当たり前だと思つていたことを突然変えることは難しかっただろう。戦後だ、復興だ、民主主義だといくら前向きなことを声高に言つても、心の奥底では未だ整理できない後ろ向きな思いも人々の心中にはあつたのではないだろうか。特に幼少期から戦時教育を受けてきた青年男

女はそういつた思いを抱えていたと思われる。つまり文学作品に描かれた復員者には、復員者以外の人々にも一種の共感ができる部分があつたといえるのではないだろうか。

四、〈復員者〉としての直治とその受容

先行研究では、太宰と重ねて考えられることの多い直治だが、実際には戦場に行つていない太宰とは異なり、当時の多くの青年たちと同様に〈復員者〉としての側面を持つている。当時の時代背景を考慮し、一般読者による直治の受容を考えた際にこの設定は重要なポイントになるのではないだろうか。なぜなら、直治は一、二、三で考察してきた復員者像と多くの点で共通しているからである。

戦後、復員者の中でも特に直治と同年代の若者たちは「特攻隊くずれ」と言われ、文学作品の中でも無法者や不良青年のように扱われることが多かったが、復員者である直治も先に見てきたように薬物中毒や酒、不特定多数の女性と関係を持つなど不良青年として描かれている。饗庭氏は

復員してきた人間というのは一度日常性から出、戦争という極限的状态の中に生き、人間性のあらわな部分を見せしめた者である。死への予感に生きつづけたために、そこから生を考えるという習慣をなかなか失うことのできない人間である。一度地獄を見てしまったものは、あ

らゆる事柄が全くぬるく映じると言つてよい。したがつて復員者の一側面は、戦後久しく「無法者」的な目でみられることが多かった。

と語っているが、直治もこの饗庭氏の指摘の通り「無法者」として描かれているのである。

また復員後、姉のかず子に「南方のお話を、お母さまに聞かせてあげたら？」と提案された直治は、「何も無い。何も無い。忘れてしまった。日本に着いて汽車に乗つて、汽車の窓から、水田が、すばらしく綺麗に見えた。それだけだ。電気消せよ。眠られやしねえ。」と素っ気なく答え、戦場での体験を語ろうとしない。少なくとも二年近くいた場所のことをそう簡単に忘れてしまったとは考えにくく、意図して語りたくないものだと考えられる。これは面倒だから、という理由ではなく、当時の他の復員者と同じように辛い記憶を思い出したくないために語りたくないのだろう。南方と言えば、激戦地であったことでも有名である。同じく南方へ徴兵されていた大岡昇平の「野火」（一九五二年、創元社）や「武蔵野夫人」（一九五〇年十一月、講談社）の中には戦場での食人のエピソードが語られており、直治もそういった悲惨な現場を経験していたのかもしれない。

さらに、二で述べたように実社会において復員者達は、平穩な日常に破綻をきたす人物として位置づけられていたが、

「斜陽」の直治も同じように平穩な日常を壊すトリガーとして描かれている。直治は南方の島に徴兵されて以来、行方不明となつており、いつ戻ってくるのか、そもそも生きているのかさえない状態であった。姉であるかず子は「きつと逢える」と信じていたが、母は「直治には逢へないと覺悟」をして生活していた。そのため、かず子も母も時々「あ」と直治のことを思い出すこともあったものの、直治不在の生活を「何事も無く、安穩に」続けてきたのである。東郷克美氏は、この母娘二人きりの日常を「桃源境」と称しているが、この「桃源境」も復員者である直治が帰還することで「直治が南方から歸つて来て、私たちの本當の地獄がはじまつた。」とかず子が言っているように壊されてしまうのである。

また直治は、思想や考え方も当時の復員者の青年に共通している部分がある。「夕顔日誌」では、

思想？ウソだ。主義？ウソだ。理想？ウソだ。秩序？ウソだ。誠實？眞理？純粹？みんなウソだ。

デカダン？しかし、かうでもしなけりや生きてをれないんだよ。そんな事を言つて、僕を非難する人よりは、死ぬ！と言つてくれるほうがありがたい。さつぱりする。けれども人は、めつたに、死ぬ！とは言はないものだ。ケチくさく、用心深い偽善者どもよ。

戦争。日本の戦争はヤケクソだ。

ヤケクソに巻き込まれて死ぬのは、いや。いつそ、ひとりで死にたいわい。

人間は、嘘をつく時には、必ず、まじめな顔をしてゐるものである。この頃の、指導者たちの、あのまじめさ。ぷ！

などと社会に対する批判が語られており、先述してきた実社会や文学作品の中の復員者たちの心境に通じているように考えられる。ただし、これが書かれたのは作中では六年ほど前であるとされており、直治が戦争に行く前であるところに注意が必要である。

「特攻隊くずれ」や「敗残兵」などと復員者に対して戦後社会で人々をとった態度は冷ややかなものであったが、それに對し復員者たちは

「戦争中は軍神だとかなんだとか言っていたのに、今度は戦争犯罪を怖れて東京から逃れてきた、あれは戦犯だと遠巻きに見られるようになり（略）敗戦でがらりと態度が変わり、そんな言い方されるといい気持ちはいません。」

多くの民間人が我々を憎悪の目で眺めていた。（略）と、突然、その群衆の一部から「お前たちもつと一生懸命、戦闘をしなかったから負けたのだ」という怨嗟の声が発せられ、そのうち群衆の罵声が一段と大きくなってきた。そして行進の列に石が投げられ、顔に、頭に、体に当たってきた。練習生は歯を食いしばり、黙々と行進する。（略）我々は涙を流すことすらできない悔しさで、この民間人の行為に耐えて本隊へと行進を続けてきた。そんな感情が思わず私の涙となってきたのかもしれない。やがて、気持ちも落ち着いてきた時、また、訳の分からぬ悔しさで涙の出たことを思い出す。

と当時の民間人の手の平を返したような仕打ちについて語っている。戦中、復員者たちは兵隊は偉いものだとか教え込まれ、周囲からも兵隊に行くことを斡旋され、「軍神」などと担ぎ上げられていた。それにも関わらず、日本が戦争に敗れ、戦場から帰ってきた途端にこれまでの指導者たちはこぞって自分の責任ではないと発言し、今まで命をかけて護ってきた国は敵国の占領下に陥り、周りの人間からも「特攻隊くずれ」「敗残兵」「戦犯」だと罵られた。こうした復員者の青年たちの胸中には、もはや社会は信じられないという気持ちがあっただろう。先に引用した「夕顔日誌」の社会批判の文章は直治が戦中に書いたものではあるが、この作品を読んだ復員者

たちにとつてはまるで自分たちの心を代弁したような文章だったのではないだろうか。死を常に考え、社会を批判する直治の姿は、当時の復員者の青年たちと重なるのである。

このように「斜陽」に描かれた直治は、当時の世間のイメージや文学作品の中で描かれた〈無法者〉〈語らざる者〉〈破壊者〉〈社会批判〉などの復員者像を踏襲していると考えられる。復員者という設定が作品の中で強調されることはほぼ無く、作者の太宰自身もそこに力点を置いて直治を書いたわけではないかもしれないが、戦後の社会や復員者を描いた文学作品の流れの中に「斜陽」という作品を置いてみると、ほとんど違和感を感じないのである。そのため、当時の読者の目に直治は、よくいる、典型的な復員者の青年のように映っただろう。そしてまた、復員した青年たちにとって直治は、強く共感できる存在であったといえるのではないだろうか。

五、まとめ

饗庭氏は「ある意味で戦後の復員者の本質的な部分を彼はもっている」と指摘した上で、直治は「時代の子」であると述べている。これまでの考察から、直治は戦場を知らない作者太宰の青年期の分身であると同時に、「斜陽」発表当時の世間の報道や文学作品などの復員者像を踏襲した人物であるということが分かった。

「斜陽」執筆当時の担当編集者であった野平健一など太宰

の周囲には若い復員青年たちが大勢いた。また、「斜陽」発表と同年の一月に『群像』で発表された「トカントン」〔群像、一九四七年一月〕という作品は、太宰のファンであった青年復員者保知勇二郎が太宰に宛てた手紙がモデルとなっていると言われており、主人公は復員青年という設定になっている。これらのことから、太宰がどこまで力点を入れたかは不明であるが直治を復員青年という設定にしたことは、太宰自身多少なりとも思い入れがあったと推測できる。

一方発表当時の読み手側は、作中の直治が当時の復員者像を踏襲していたことから、実社会に多くいた〈復員者〉と直治を重ねて受け取っていたことが推測できた。そういった意味で当時の人々にとって直治は、まさに「時代の子」のように映っただろう。

さらに、三島由紀夫は当時の「斜陽」ブームについて「さて、私の周囲の青年たちの間における太宰治熱はいよいよ高まり「斜陽」の発表当時⁽⁸⁾にいたって、絶頂に達した感があった。」と語っている。当時の青年たちと言えば、ほぼ全員が戦争に駆り出された経験があるか、それを予期していた者たちであると考えられる。そのような「青年たちの間」で「斜陽」は熱狂的に受け入れられていたのである。先にも述べたように「夕顔日誌」などに書かれていた直治の思想は、当時の若者の心情に通ずるものがあった。したがって、直治は競争に行っていない一般の人々の目には巷の典型的な復員者の

ように受け取られ、直治と同じように戦争へ行った経験のある青年たちにとっては自分たちの思いの代弁者のように受容されていたといえるのではないか。

太宰が直治を描くとき、自身の青年期の苦悩を反映させたことは確かだろう。しかし、その苦悩は同時に混乱の戦後日本社会を生きた青年たちにも共感を持って受け入れられたのである。

こうした直治の現代とは違う受容のされ方も当時の「斜陽」人気的一端を担っていたのだといえるのではないだろうか。

[注]

- (1) 太宰治『太宰治全集十巻』(一九九九年一月、筑摩書房)
- (2) 山内祥史『太宰治の年譜』(二〇一二年十二月、大修館書店)
- (3) 野平健一「太宰治著『斜陽』」、『矢来町半世紀』一九九二年八月、新潮社
- (4) 豊島与志雄、高見順、中島健蔵「創作合評会」、『群像』三巻第二号、一九四八年一月
- (5) 東郷克美「太宰治とチェーホフ」『斜陽』の成立を中心に(『國文學解釈と鑑賞』第三十七巻十二号、一九七二年十月)、臼井吉見「太宰治」(奥野健男編『太宰治研究』、一九六八年四月、筑摩書房)、奥野健夫「斜陽」小論(『近代文学』第八号、一九五三年六月)など。
- (6) 櫻庭孝男編『鑑賞』日本現代文学第21巻 太宰治(一九八一年二月、角川書店)

- (7) 木村一信「開戦前後の太宰治―「徴兵」失格を受けとめる―」山内祥史、笠井秋生、木村一信、浅野洋編『二十世紀旗手・太宰治―その恍惚と不安と―』(二〇〇五年三月、和泉書院)
- (8) 片山晴夫「太宰治『斜陽』の直治とはいかなる人物か」『語学文学』第三十九号(二〇〇一年三月)
- (9) 『広辞苑』第六版(二〇〇九年、岩波書店)
- (10) 田中宏巳「復員・引揚げの研究」(二〇一〇年六月、新人物往来社)
- (11) (10)と同じ
- (12) (10)と同じ
- (13) (10)と同じ
- (14) (10)と同じ
- (15) 河辺正三、浜井和史「復員に関する記録／史料解題」(二〇一〇年四月、ゆまに書房)
- (16) 渡辺清「碎かれた神 ある復員者の手記」(二〇〇四年三月、岩波書店)
- (17) 紅野敏郎ほか「編年体文学史 文学 明治100年」(『國文學解釈と教材研究』六月号増刊、一九六七年六月)
- (18) 浜井和史「遺骨の帰還」(増田弘編『大日本帝国崩壊と引揚・復員』二〇一二年十一月、慶應義塾大学出版社)
- (19) 櫻庭孝男編『鑑賞』日本現代文学第21巻 太宰治(一九八一年二月、角川書店)
- (20) 大岡昇平『武蔵野夫人』(一九五〇年十一月、講談社)では、復員青年はいずれ「怪物」と成り得る可能性がある存在として登場している。
- (21) 東郷克美「死に行く「母」の系譜」(東郷克美『太宰治という物語』二〇〇一年三月、筑摩書房)

- (22) 吉田裕『兵士たちの戦後史 戦争の経験を問う』(二〇一年七月、岩波書店)
- (23) 饗庭孝男編『鑑賞 日本現代文学第21巻 太宰治』(一九八一年二月、角川書店)
- (24) 神谷忠孝「トカトントン」神谷忠孝、安藤宏編『太宰治全作品研究事典』(一九九五年十一月、勉強社)、津島美知子『回想の太宰治』(一九九七年八月増補改訂版、人文書院)など
- (25) 三島由紀夫「私の遍歴時代」(佐伯彰一、松本龍一監修『作家の自伝37 三島由紀夫』一九九五年十一月、日本図書センター)